

最後まで“らしさ”を通した「別れの美学」

—「最後に残るものは人に与えたものしかない」

久米宏さん(ジャーナリスト)と
青木匡光さん(人間接着業)逝く! —

本誌編集長 佐藤 公(さとう たかし)

(2026年新春号)

今年になって「唯一無二の存在として親しまれた、対照的な二人が旅たった。

一人は、音楽番組の司会や「ニュースステーション」(テレビ朝日系)のキャスターとして、国民的な人気でオーラを放っていた久米宏さん。一月二日に肺がんのため81歳で亡くなった。

もう一人は、人間接着業という新分野を切り開き、人間関係に悩む人々に指針を与え、意欲的な人々を結びつけてきた青木匡光さん。地味な仕事であるが、人間愛に満ちた人だった。一月十二日に脳梗塞による肺炎のため92歳で永眠した。

久米さんの功績の一つは「ニュースを変えた」ことである。報道番組「ニュースステーション」は1985年に始まり、2004年に久米さんに代わって「報道ステーション」として再スタートしたが、「ニュースステーション」は「ニュースとお茶の間、視聴者の距離を飛躍的に縮めた」と久米さんの報道姿勢が評価された。時に厳しく、そして痛快に、縦横無尽のスタジオワークで、ニュースの本質に迫る姿は「テレビ報道の革命児」そのもので、久米さんの粋な報道姿勢が人気を得た。

久米さんに数々の報道語録がある。

①「風俗を語るときは政治的に語れ。政治を語るときは風俗を

語るように語れ」この大宅壮子さん(ジャーナリスト、1970年没)の言葉が座右の銘という。

②「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくまでゆかいに」と、井上ひさしさん(小説家、2010年没)の言葉にもあつたが、久米さんは「難しいことを難解に伝えたり、悲しみを悲劇的に伝えるのは阿呆でも出来る」とう表現するかの工夫が楽しいし、やり甲斐を感じる仕事だと思つ」とニュースキャスターの報道のあり方を語っていた。

③また、8月15日を「終戦の日」ではなく「敗戦の日」と言い続けていた。「絶対に戦争はしてはいけない」という永六輔(放送作家、2016年没)さんからの精神を継承した。

そして、「ニュースステーション」に込めた久米宏さんの「秘めた思い」とは――

「(視聴者に)僕たちは自由に発言し、行動していいという生き方を伝えること。自分が生きているうちに日本が再び戦争をしないようにすることだ」

久米さんが訴えたかったのは、この「庶民ナシヨナリズム」ではなかったか。戦争をする日本になることに強く反対し、不正義なことに怒り、弱者への同情が

強くあつた久米さんは「庶民ナシヨナリスト」の見本のような人だった。

久米さんは、こんな言葉も残している。「戦争は、気づかないうちに始まる。人々が気づかないうちに、戦争に入っていく」この言葉は、今日の世界、社会に対する警鐘でもある。

「ニュースステーション」の最終回(2004年3月26日)で「自分へのご褒美」とビールを飲みながら「本当にお別れです。さようなら」と手を振つたが、妻の麗子さんによると、「久米は、最後までらしさを通したと思います。大好きなサイダーを「気に入るんだと、旅立ちました。

まるで「ニュースステーション」の最終回でビールを飲みほしたあの時のように。自由な表現者として駆け抜けた日々には悔いはなかったと思います。常に新しいことに挑み、純粋な心で世の中の疑問を見つめる人でした。彼は若いスタッフが大好きでした。楽しそうに他愛もない冗談を交わし合つた時は、かけがえのない時間だったに違いありません」(テレビ朝NEWS)と最後までらしさを通した久米宏さんの「別れの美学」を語った。

一方、青木匡光さんは「メイデー」(人間接着業)として人間関係を悩む人々に指針を与え、意欲的な人々を結びつけてきた。

特に、新宿の「ヒューマンハーバー」では45年間「Give and Give」の精神で人と人をつなぐ活動を続け、2019年3月に惜しまれつつ閉港した。報酬を求めず、講演や執筆などを通じて得た利益を「先義後利」(まずは人のためにできることをやってみる)という考えで、ユニークさを超越した「至高の存在感」ビジネスだった。

著書「シニア時代は不良長寿で」(JDC出版)の最後で、青木さんは「自分の好きなこと、得意なことをやってみて、一区切りついたらコンマ。メリハリがついていい。ずっとコンマを続けていく生き方をすれば、天の神様から『もついのじゃない?そろそろ天国へ来なさい』と声がかかるまで生きればいい。そうすると、『死ぬまで生きる』というか、前向きな人生を生きていける。そついつうに人生をもつていきたいと考えます」と青木流「別れの美学」までの生き方を述べている。

「亡くなる前日まで母や姪(私のいとこ)ともハイタッチしたりしていたそつです」(子息、青木元さん)と、青木流無言の「別れの美学」を实践したといえるまいか。

本誌では青木さんの死を悼み「人間接着業 青木匡光先生追悼特集」を組んだので、お目通しただければ幸いです。